

# くらし

月 アラカルト

健康・エコ  
旅  
趣味・食  
エッセイ  
シス  
水木金土日  
育医食

「球根は厳しい寒さにさらされるほど、花や芽がしつかりして、美しい花が咲く」「肥料の溝の深さはこれくらい」「球根の向きはこんなふうだ」。豆知識や

## 春を待つ

うんちくを伝授した。うれしいことに娘は真剣に聞いてくれた。

「猫の額ほどの花壇に、四季折々に咲く花。ユリ、バラ、アジサイ、百日草などがひそかに咲くのだ。一年中楽しませてくれ、心が和む」。つい調子に乗って多弁になった。

そして、「花の好きな人に悪い人はいない」が口を吐いて出てきた。私の好きな言葉だ。

作業を終えた娘は、顔の汗を拭きながら、腕組みして「春になり、きれいな花が咲いたら、まず自分の家の玄関に一輪飾ろうかな」と、小声でぼそとつぶやいた。

芽吹き花咲く春を待ち遠しく思う気持ちが娘にも分かったのだと、うれしくなった。私も同じ思いである。それにしても、ほっこりとした一日だった。

広島市東区 主婦 田山 節子 77歳

こたえ



ホテルの部屋で文男さん(中央)を囲む時子さん(右から2人目)と娘たち。大きな窓からは瀬戸内海が見えた(竹下さん提供)

フリーランス看護師竹下雅彦さん(49)は広島県北広島町IIが同行した。事前にホテルと打ち合わせ、車椅子の導線も確認した。宿泊日は処方薬と急変時の搬送に備えた医師の紹介状を携え、介護タクシーで出発。先進7カ国首脳会議(G7サミット)の主会場になったホテル内を散策し、部屋で好物のイカの刺し身を食べる文男さんと家族を見守った。

結婚式を挙げていなかった文男さん夫婦。ホテルのチャペル前で、娘が即興で口ずさんだ結婚進行曲に合わせて「57年越しの式」をした。時子さんが車椅子を押して一步一步進み、幸せな結婚生活を振り返った。

## 海辺のホテル宿泊・57年越しの挙式… 保険適用外だが安心感

2020年、保険外サービスを提供するフリーの看護師として起業した。コロナ禍が一服した23年、活動を本格化させた。利用料は1時間3300〜6600円。「急変時に病状を医師に適切に伝えられ、連携できるのは強み。最後まで自分らしく生きるための選択肢を増やしたい」と、認知度アップに取り組む。

安佐南区の「リリーフ広島」も外出や旅行を支援す

東広島市の昭和観光社は、終末期患者の泊まり旅行をコーディネートしている。温泉旅行のニーズが高く、病状に合わせて看護師や介護士を手配する。パリアプリ旅行を専門にし、先天的ではなく交通事故や脳疾患が原因となった「中途障害者」の利用も多い。

プリンスホテルに泊まった文男さんの担当医で、在宅診療に力を入れている高橋内科小児科医院(安佐南区)の高橋祐輔医師(47)は「残された時間を旅行などに使うことで、患者と家族のQOL(生活の質)は高まる」と話す。「多くの人が亡くなる『多死時代』を迎え、個々のニーズに柔軟に応えられる受け皿が地域に広がれば」と期待している。

# もう一度旅を 納得いく最期支える

終末期を迎えた人の「旅行したい」との願いをかなえるため、看護師の付き添いサービスが広島でも広がり始めた。遠出は病状急変時のリスクがあり、医療・介護保険制度は適用されないため原則全額が自己負担。それでも「納得いく最期の迎え方」のニーズは強いようだ。(梁暁雨)

「最高の思い出になった。言うことなしじゃ」。昨年11月末、広島市安佐南区の竹岡文男さんはホテルの窓の外に広がる海と、営建建設会社で仕事に関わった海田大橋を見詰め、満足そうにほほ笑んだ。10日後、83歳で亡くなった。

末期の腫瘍がんと診断され自宅で療養していたが、医師から「年を越すのは厳しい」と告げられた。海と釣りを愛し、病床での口癖は「瀬戸内海が見たいのお」。妻の時子さん(77)と家族は「悔いが残らないように」と1泊旅行を計画した。海辺に立つ南区のグラントプリンスホテル広島を宿泊先に決めた。

## 保険適用外だが安心感

帰宅後、文男さんは次の旅行に意欲を見せるほど元気を取り戻したという。

隣室に控えた竹下さんには、鎮痛剤の投与や酸素吸入器の使用を管理してもらった。宿泊費を除く費用は10万円弱。安くはないが「看護師がいる安心感は大変大きい。竹下さんならではの決意できなかった」と、時子さんは感謝する。

竹下さんはかつて総合病院の入院病棟などで働き、終末期の患者に多く接してきた。「短時間でも帰宅してペットと遊びたい」「墓参りに行きたい」「買い物したい」。そんな望みを聞いても、保険制度で外出や旅行の付き添いは認められていない。無念さが募った。

東広島市の昭和観光社は、終末期患者の泊まり旅行をコーディネートしている。温泉旅行のニーズが高く、病状に合わせて看護師や介護士を手配する。パリアプリ旅行を専門にし、先天的ではなく交通事故や脳疾患が原因となった「中途障害者」の利用も多い。

プリンスホテルに泊まった文男さんの担当医で、在宅診療に力を入れている高橋内科小児科医院(安佐南区)の高橋祐輔医師(47)は「残された時間を旅行などに使うことで、患者と家族のQOL(生活の質)は高まる」と話す。「多くの人が亡くなる『多死時代』を迎え、個々のニーズに柔軟に応えられる受け皿が地域に広がれば」と期待している。

看護師同行サービス広島でも



「患者が自分らしく生きるサポートをしたい」と話す竹下さん



ふる里の風景

文と切り絵 村上保 460